発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 ③3033番 ③3034番
編集兼発行人　山下　開
半年間600円　送料共

お礼

朝日炭鉱（北海道）の災害犠牲者カンパを行いましたところが、七万一千五百三十七円の多額の金が集まりました。どうもありがとうございました。　三池労組

からくりをあばく

〝微傷〟でごまかし、負傷者を大量まっ殺

許されぬ〝人間無視〟

保安部とは何をするところか？

本所保安委員　松岡大喜

三池炭鉱では、生産第一主義による合理化のため、今年も宮浦鉱で早くも新井さん（二十六才）が殺され、また各鉱で多くの仲間が傷つけられています。とくに三川鉱でひどく、好出炭のかげに負傷者が続出しています。

生産と災害が両輪

会社は災害のたびごとに「保安第一だ。保安と生産は車の両輪だ」、といってきました。でも、現在の三池では、「生産と災害」が両輪となり、保安はどこかに置き去りにされているのが実態です。いままでは「好出炭のときは災害が少ない」、といわれていました。しかし、無理な出炭には災害がつきものです。

その〝災害〟の件数を「いかにして減らすか」、ということで考えだされたのが〝保安部預り〟というものです。

「負傷して仕事はできなくとも動けるなら、ともかく保安部までおいで下さい。出勤扱いとして、保安部で預ります」――と、いうわけです。「そうすれば負傷件数は減り、賃金は補償してあげられる。お互いに、結構なことではないか……」。

三井お手のもののからくりで、それで事実をうまくかくせるつもりでしょうが、しかし絶対にかくし通すことはできません。

会社の都合が先決

まず、負傷程度の区分について見ますと――

①死亡、②重傷（休業日数が十四日以上を要するもの）。③軽傷（休業日数が三日以上を要するもの）。④微傷（休業日数が二日以内のもので、この分は負傷統計上記録に残らない）。

なお右の区分は、労働基準法にもとづくもの。

ところで三井では、負傷程度の区分は、医師の診断、負傷の程度で決るのではなく、会社の都合によって決るものです。これほどの人間無視は、他に例がないでしょうが、これこそ本質的には、CO患者や遺族のまっ殺とまったく同一のものです。

また三井では、その病院の医師の立場も、赤チンキを塗って、傷ぐちを縫い合わせるだけの――つまり現在問題になっている、大相撲の行司の立場と同じで、たとえ自分なりに判定はしても、採決権もない、いわば「あなたまかせ」の飾りもの、にされています。事実折角の医師の診断が、不法に踏みにじられ、保安部出動に割引きされ、そして〝微傷〟ということにされ、巧みに公式上の〝負傷件数〟からまっ殺されるわけです。

さすがに、会社のそんなやり方に、現場からブツブツや不平不満がでるから、それに対して、こんどは〝負傷減運動〟という言葉を使って、職場ごとに目標を決めさせ、そして「ハイ、負傷減目標が達成できました」、として石けんを配り、労働者の不平不満を、逆に会社協力に変えて行く念の入れようです。

微傷者がうようよ

別表(1)「四山鉱における負傷者数の統計」、を見て下さい。

四山鉱で、例のZD運動が提唱され、それと並行して負傷減運動が推進されはじめたころから、なるほどその〝負傷者数〟は、公式の統計上からは急速に減って行きました。が、公式統計上の〝負傷件数〟に記録されない〝微傷者〟が倍増、現在に至っては、その微傷者数が全負傷者さえはるかに上まわっている実態です。これが、「負傷者が減った」とする、三井鉱山のからくりです。

ひどい例になりますと、四山鉱では、何と〝微傷四カ月〟という記録さえあり、一カ月ぐらいの〝微傷〟は各鉱でザラです。

〝保安部預り〟といい、この〝微傷〟といい、これこそ〝ZD原生病〟であり、〝保安部原生病〟といって差し支えないでしょう。

毎日、各鉱の保安部には〝保安部預りの微傷者〟が、二十名～三十名程度は居るはずです。先ごろなど、三川鉱の保安部には、それが四十数名にものぼり、何とも異様な雰囲気だったと聞きました。

保安部の仕事は？

現在、採炭現場では人員が足りず、保安責任の職員が本来の仕事はそっちのけ、目の色かえて生産作業に従事するところまで追いこまれています。その結果、当然保安がおるすになり、災害が続発するという〝悪循環〟がつくりだされていますが、それをつくりだしているのが、ほかならぬ保安を守るべき保安部自からですから、開いた口がふさがりません。

第一、重大災害（保安委員の招集を必要とします）かどうか、を決める判断でも問題があります。

会社は、保安委員会の席では「死亡事故ばかりにこだわらない」――といっていながら、ここでは医師の権威（実際にそれは無くなっているが）を最大限に利用して、こんなことさえやるのです。

先の、新井野志男さんの死亡災害の場合が、それです。一度は、「危険な状態だから……」といって、保安委員を招集しておきながら、「治療中だから、しばらくようすを見る」といって、そのまま待機させました。その後、「医師が大丈夫といったから、もう解散して下さい」、というので「そんならば……」となりましたが、「念のため、もう一回電話して見てから」、ということになり、保安委員が病院に電話して見たところが、「また、危険な状態になったから……」、というわけで、それから保安委員を入坑させるといったデタラメぶり。

しかも新井さんの死亡は、その日（二月十九日）の午後八時二十分でありながら、保安委員の入坑決定時刻は、同八時四十五分。そのうえ会社は、保安委員に対して新井さんの死亡を知らせないまま、入坑させています。

このことは去る二月十六日、三川鉱坑底五十卸で起きた、五人が生き埋めとなった落盤事故についても、会社が「あれは単なる籠居であって、事故ではない」、という態度をとっている事にも通じるものです。

まず低賃金打破を

〝保安部預り〟といい〝微傷〟といい、CO患者・遺家族をまっ殺して行く態度といい、邪魔になるもの、目ざわりなものは踏みつけ、踏みにじり、ただ目標出炭にばかり猛進して行く会社です。

私たちは、負傷した際〝保安部預り〟で、一時しのぎに、低賃金生活をきり抜けるような、そんな目茶苦茶な人間無視のやり方を許さず、三井の低賃金政策そのものの打破のために、また大幅賃上げを獲得することを目指し、春闘を闘い抜かなければならないと思います。そうしないと、暮らしどころか、生命そのものをいつまっ殺されないとも限らないのです。

四山鉱に見る負傷統計 (1)

年度月別	重傷	軽傷	計	微傷
42年8月	41人	28人	69人	42人
〃,9〃	32	30	62	36
44, 8〃	43	34	77	37
〃,9〃	39	38	76	33
45, 8〃	18	5	23	42
〃,9〃	27	7	34	53
46, 8〃	24	8	32	47
〃, 9〃	19	8	27	60

各鉱別・年度別〝負傷統計〟の推移 (2)

鉱所名	年度	死亡	重傷	軽傷	計	微傷
宮浦鉱	45年	1人	377人	120人	498人	436人
〃	46〃		885〃	54〃	339〃	484〃
四山鉱	45〃	2〃	323〃	141〃	466〃	590〃
〃	46〃	2〃	234〃	111〃	346〃	668〃
三川鉱	45〃	4〃	504〃	179〃	687〃	670〃
〃	46〃	5〃	400〃	95〃	500〃	589〃
本所	45〃	—	6〃	4〃	10〃	10〃
〃	46〃	—	6〃	3〃	9〃	9〃

港務所正門前での抗議集会を終り、やがて怒りのデモへ……。

合理化に抵抗闘争強化

13日、全山時限スト

港務所門前集会で意志統一

三井鉱山が、三千人＝二万トン（日産）体制の確立をめざしすすめている合理化に抗議するため、三池労組はこの十三日全山時限ストライキに突入。同日午後三時半から、組合員が三池港務所正門前に集まり、抗議集会を開催、合理化に対し、各職場で抵抗闘争を強めることを改めて意志統一した。

こんどの行動の指標は、①四山鉱のシールド自走枠導入反対。②三井病院平井診療所の廃止反対。③港務所鉄道課の合理化反対。④保安の確立――の四項。

この日の抗議集会はとくに、三井の合理化に真っ向うからぶつかっている各鉱所の組合員代表が発言、合理化がいかに労働者に重労働となっているか、坑内保安をいかに危機に追いこんでいるか、また地域住民の暮らしをいかにおびやかしているか、事実をつきつけながら、はげしく抗議した。同時に、命を守るためには、単に三池労組員ばかりでなく、新労組員や組夫の人びととも、手をにぎるための地道な活動を強化することこそ何より大切だ――と指摘した、四山指導部五分会の藤末成助さんの言葉が胸をうった。

なお、集会全参加組合員は集会終了後デモで怒りの意志表示を行なったが、三井三池の現実は、いよいよ抵抗闘争を全職場で強めることを求めている。

おわび

本紙前号の重要記事中校正ミスをだし、ご迷惑をおかけしましたことを、深くおわび致します。

その一面「三池で重大災害続発」の記事の見出しに「新川さん…」とありましたのは「新井さん」の、「鉱長＝岡田二郎」としたのは「松田修」の、また同紙三面の「問題点はどこにあるか？」の記事中「荒井」は「新井さん」の間違いでした。　編集部

大牟田で統一行動

沖縄批准書交換に抗議

〝沖縄返還批准書交換〟の日の去る十五日、大牟田では、大地評加盟組合の労働者をはじめとする市民が、午後五時から市庁舎前広場に集まり、〝三・一五沖縄返還批准書交換反対、四次防粉砕大牟田地区集会〟を開催、あくまで真の沖縄返還を実現するために闘うことを誓い合った。

日米政府間による沖縄返還協定の強行は、米軍からわが国の自衛隊への軍事的肩替り（それとて米軍の下請にすぎない）による、基地の再編強化、自衛隊の増強、軍国主義復活への道を強化していることは、四次防予算の先取り一つとっても明らかで、集会は全国的統一行動の一つだった。